

平成 14 年度 国民生活選好度調査

- 国民の意識とニーズ -

平成 15 年 3 月

内閣府 国民生活局

は し が き

我が国は、少子高齢化、グローバル化、情報化の進展等、経済社会の構造的変化に直面しており、国民の価値観、生活に対する意識も多様化してきている。

国民生活政策を考えるにあたっては、こうした国民の生活意識の変化を的確に把握する必要があり、国民のニーズに合ったきめ細かな対応を図ることが望まれている。

平成14年度の国民生活選好度調査は3年に一度の時系列調査(質問項目は同一)の年にあたり、国民の意識とニーズの変化を把握するため、国民がどのような事柄を重要と考え、それがどれだけ満たされているか、またどの程度政策に期待しているかという点について調査を実施した。

本報告書は、この調査結果を取りまとめたものである。多くの方々に広く御活用頂ければ幸いである。

平成15年3月

内閣府国民生活局長
永谷 安賢

目 次

I	国民生活選好度調査について	1
II	調査結果の要約	3
III	調査結果	5
	第1章 重要度、満足度	5
	1. 領域別重要度 - 個人にとって重要な領域 -	7
	2. 領域別政策優先度 - 政策として力を入れてほしい領域 - ...	7
	3. 領域別重要度と政策優先度の関係	8
	4. ライフステージ別領域別重要度	8
	5. 「医療と保健」、「収入と消費生活」の領域について ...	9
	6. 「勤労生活」の領域について	9
	7. 生活全般についての満足度	10
	第2章 世の中の方向、老後の見通し	12
	1. 世の中の方向について	12
	2. 老後の見通しについて	12
	3. 個人負担について	13
IV	60の個別項目に関する重要度、充足度の主要変化	32
V	調査票及び単純集計結果	48
VI	参考資料	81
	1. 国民生活選好度調査の沿革	81
	2. 図の基礎資料	84

I 平成 14 年度国民生活選好度調査について

1．調査の目的

本年度の国民生活選好度調査は、1978 年度以降 3 年ごとに実施している時系列調査であり、国民生活政策の立案あるいは政策実施の際の判断材料とすることを目的とし、国民生活の様々な分野のニーズ、満足度等、人々の主観的意識について調査を行った。

2．主要調査項目

- (1) 国民生活に関係する 60 項目についての重要度、充足度
- (2) 10 の福祉領域の重要度、政策優先度
- (3) 生活全般の満足度

3．調査対象

- (1) 母集団 全国に居住する 15 歳以上 75 歳未満の男女
- (2) 標本数 5,500 人
- (3) 抽出方法 層化二段無作為抽出法

4．調査時期

2002 年 10 月 11 日～11 月 14 日（35 日間）

5．調査方法

調査員による個別訪問留置法

6．調査実施委託機関

株式会社 日経リサーチ

7．回収結果

- (1) 有効回収数（率） 4,159 人（75.6%）
- (2) 調査不能数（率） 1,341 人（24.4%）

8．用語の説明

(1) 重要度

重要である程度について「極めて重要」から「まったく重要でない」まで5段階で尋ねたもの。

なお、重要度得点とは、重要である程度を得点化したもので、重要度の5段階それぞれに「極めて重要」＝5点から「まったく重要でない」＝1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、重要度に関する人々の評価を指標化したものである。

(2) 充足度

充足している程度について「十分満たされている」から「ほとんど満たされていない」まで5段階で尋ねたもの。

なお、充足度得点とは、充足されている度合いを得点化したもので、充足度の5段階それぞれに「十分満たされている」＝5点から「ほとんど満たされていない」＝1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点を求め、充足度に関する人々の評価を指標化したものである。

9．留意事項

(1) 1987年度の調査から、「わからない」という選択肢を回答から外したため、それ以前の調査結果と単純には比較できない場合がある。

(2) 結果数値(%)は表章単位未満を四捨五入してあるので、内訳の合計が計に一致しないこともある。

(3) 統計表等に用いた符号は次のとおりである。

0.0：表章単位に満たないが、回答者がいるもの

-：回答者がいないもの

II 調査結果の要約

第1章 重要度、満足度

1. 領域別重要度 - 個人にとって重要な領域 -

- 「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高く、近年「勤労生活」が高まっている一方、「家族」が低下している。

2. 領域別政策優先度 - 政策として力を入れてほしい領域 -

- 「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高くなっている。「勤労生活」は96年に「生活環境」を抜いて以来、3位となっている。

3. 領域別重要度と政策優先度の関係

- 各領域の重要度と政策優先度の相関関係をみると、「家族」を除く、すべての領域について重要度が高いと政策優先度も高い傾向がある。

4. ライフステージ別領域別重要度

- 学校教育期では「収入と消費生活」「勤労生活」の重要度が同じ割合で最も高く、独身期では「勤労生活」、家族形成期と家族成長期では「収入と消費生活」、家族成熟期と老齢期では「医療と保健」の重要度が最も高くなっている。

5. 「医療と保健」「収入と消費生活」の領域について

- 各領域の個別項目をみると、どちらの領域も重要度は同程度に高いが、充足度は「医療と保健」の方が「収入と消費生活」よりも高くなっている。過去20年近くの動きをみると、重要度が高まる傾向にある一方で、充足度は低下傾向にある。

6 .「勤労生活」の領域について

- 重要度と政策優先度がともに大きく伸びた「勤労生活」の領域についての個別項目をみると、多くの項目で、重要度の上昇と充足度の低下が生じている。このような動きが、「勤労生活」の政策優先度が大きく上昇している背景になっている。

7 . 生活全般についての満足度

- 生活全般に「満足している」と回答した人の割合は、調査開始以来最も低くなっている。
- 生活全般に「満足している」と回答した人の割合は、男女とも 50 代以下では 4 割前後にとどまる一方、60 代、70 代は他の年代と比べ高い水準にある。

第 2 章 世の中の方向、老後の見通し

1 . 世の中の方向について

- 「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は、90 年をピークに低下しており、調査開始以来最も低くなっている。
- 「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は、20 代以下および 70 代で相対的に高くなっている。

2 . 老後の見通しについて

- 「自分の老後に明るい見通しを持っている」と回答した人の割合は、84 年をピークに低下し、調査開始以来最も低くなっている。
- 年代が上がるほど、「自分の老後に明るい見通しを持っている」と回答した人の割合が高くなる傾向にある。

3 . 個人負担について

- 社会施設の整備や社会保障の充実を図るにあたり、税金など個人の負担を増加させることについて肯定する考え方は、調査開始以来最も低くなっている。

III 調査結果

過去 20 年近くで人々の選好がどのように変化してきたのかを中心に、生活上の様々な領域についての重要度や満足度、世の中がよい方向に向かっているかどうかといった意識などに焦点をあてて調べる。

第 1 章 重要度、満足度

本章では、人々が生活の上で重要視している領域について、生活に関連した諸側面を 10 の福祉領域に分類し、人々がどの領域を重要と考えているのか（領域別重要度：問 4）、また、政府、自治体等の公的部門がどの領域に力を入れるべきと考えているか（領域別政策優先度：問 5）などについて調べる。

ここで採用した 10 の福祉領域は次のとおりである。

- (1) 医療と保健.....健康の増進、病気の予防、医療施設やサービスの整備・充実など
- (2) 教育と文化.....教育文化施設（幼稚園、学校、図書館など）の整備、教育内容の充実、教育の機会均等、文化遺産の保護など
- (3) 勤労生活.....職場の安全、雇用の安定、就労機会の確保、就業能力の開発・増進など
- (4) 休暇と余暇生活.....休暇制度の充実、余暇施設（公園、運動施設、国民宿舎など）やサービスの整備・充実など
- (5) 収入と消費生活.....収入の着実な増加、物価の安定、商品の安全性確保、商品価格の適正化など
- (6) 生活環境.....住宅の確保と質的向上、ごみ・し尿・下水処理など居住環境の向上、公害・災害の減少など
- (7) 安全と個人の保護.....犯罪の減少、人権の保護、公正な法の執行など
- (8) 家族.....親子・夫婦・きょうだい間の信頼、家庭福祉サービスの充実、家族解体の減少など
- (9) 地域生活.....地域施設（市民センター、集会場など）の充実、地域行事・社会教育の充実、地域活動の活発化など
- (10) 公正と生活保障.....所得分配の公正、不平等の是正、高齢者・心身障害者の福祉の向上など

これらの 10 領域がカバーする個別の質問項目（60）は次に掲げるとおりである。

領 域	項 目 名
医療と保健	(1) 体力の維持や増強に努めること (2) イライラやストレスなど精神的緊張が少ないこと (3) 適切な（良質な）診断や治療が受けられること (4) 費用の心配をあまりせずに診療が受けられること (5) 病気の予防や健康の相談・指導が容易に受けられること
教育と文化	(6) 保育所が充実していること（時間帯・設備など） (7) 小・中学校で子どもの能力を伸ばせる教育が受けられること (8) 高校で各人に適した教育が受けられること (9) 大学教育が意欲のある人すべてにひらかれていること (10) 技術や資格が得られる各種学校や専修学校などが近くにあること (11) 図書館などひとりでも勉強できる施設が近くにあること (12) 生涯を通じて教養を高め、趣味を広げられること (13) 文化遺産や史跡が大事にされること
勤労生活	(14) 希望する職業への転職が容易なこと (15) やりがいのある仕事や自分に適した仕事ができること (16) 職業紹介や職業訓練のための施設や内容が充実していること (17) 職場環境が快適に保たれること (18) 失業の不安がなく働けること (19) 労使間での問題が円滑に解決されること
休暇と余暇生活	(20) 年間を通じて休みを多くとれること (21) 公園や運動施設・グラウンドなどが利用しやすいこと (22) 国民宿舎、国民休暇村など公共の宿泊施設が整備されていること (23) スポーツ・クラブや趣味の会に気軽にはいれて適切な指導が受けられること
収入と消費生活	(24) 収入が年々確実に増えること (25) 目標を満たすのに十分な貯蓄ができること (26) 収入や財産の不平等が少ないこと (27) 税負担が公平なこと (28) 老後に十分な年金が得られること (29) 物価の上昇によって収入や財産が目減りしないこと (30) 食品や薬品など商品の安全性が高いこと (31) 食品の品質や量が正しく表示されていること（※） (32) 商品への不満や苦情について相談できるところがあること (33) 品揃えの豊富な店が近くにあること
生活環境	(34) 家族がそれぞれ自分の部屋をもてるような家に住むこと (35) 持とうと努力すれば自分の家が持てること (36) ゴミや下水が衛生的に処理されること (37) 通勤・通学が快適にできること (38) 大気汚染、騒音、悪臭などの公害がないこと (39) 地震、台風、火災などへの対応がしっかりしていること (40) 危険な工場や施設に対する管理が十分なこと (41) 子どもや老人でも車に脅かされず道を歩けること (42) まわりに親しめる自然があること

安全と個人の保護	(43) 女の人が、夜、安心して道を歩けること (44) 個人生活の秘密が守られること (45) 警察署、裁判所などが信頼できること (46) 税金や法律問題などを気軽に相談できるところがあること
家族	(47) 親子の間の対話があり、互いに相手を信頼していること (48) ひとり暮らしの老人やひとり親世帯の人たちなどが安心して生活できること (49) 寝たきり老人や心身障害者・障害児がいる家庭のための福祉サ・ビスが充実していること (50) 自殺や一家心中が少ないこと (51) 安心して子どもを生み育てられる環境が整っていること
地域生活	(52) 市や町の政治に住民の要望や意見が十分採り入れられること (53) 祭り、盆踊り、運動会など自分が住んでいる地域の行事が盛んなこと (54) 自分が住んでいる地域・社会をよくする活動ができる時間や機会があること (55) 市民センタ・や集会所などが自由に使えること
公正と生活保障	(56) 能力のある人が、学歴が低いことで差をつけられたりしないこと (57) 能力があつて努力すれば誰もがふさわしい地位や収入が得られること (58) 能力や仕事と同じなら男女によって昇進・収入に差がないこと (59) 高齢者や心身障害者が希望すれば仕事につけること (60) 住みたいと思う地域で希望する仕事につけること

(31) は、99 年まで「商品の品質や量が正しく表示されていること」

なお、60 の個別項目ごとの重要度、充足度の動きについては「Ⅳ 60 の個別項目に関する重要度、充足度の主要変化」において考察している。

1. 領域別重要度 - 個人にとって重要な領域 -

重要度の高い「医療と保健」「収入と消費生活」、近年高まっている「勤労生活」

10 の福祉領域の中で、現在の、あるいはこれからの生活にとって重要と考える領域を 1 番目から 3 番目まで尋ねた（問 4）。

最も重要であると評価した領域（重要度）は、「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高く、近年「勤労生活」が高まっている一方、「家族」が低下している。（第 1 - 1 図（1））

上位 3 位以内に重要であると評価した領域も、「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高く、最も重要であると評価した領域と同様となっている。また、「収入と消費生活」「勤労生活」は近年、いずれも上昇傾向にあるものの、「生活環境」「家族」は低下傾向にある。（第 1 - 1 図（2））。「医療と保健」「収入と消費生活」は 81 年以降順位に変化はないが、99 年まで 3 位であった「家族」が低下する一方、「勤労生活」が上昇し、3 位となった。

2. 領域別政策優先度 - 政策として力を入れてほしい領域 -

政策優先度の高い「医療と保健」「収入と消費生活」、近年高まっている「勤労生活」

10の福祉領域の中で、国や自治体の政策として力を入れてほしい領域を1番目から3番目まで尋ねた（問5）

最も力を入れてほしいと選択した領域（政策優先度）は「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高くなっている（第1 - 2図（1））。「医療と保健」「収入と消費生活」は81年以降順位に変化はないが、「勤労生活」は96年に「生活環境」を抜いて以来、3位となっている。

上位3位以内に力を入れてほしいと選択した領域も、「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」の順で高く、最も力を入れてほしいと選択した領域と同様である。このうち、「医療と保健」は90年から総じて低下傾向であるのに対し、「収入と消費生活」は96年以降、「勤労生活」は93年以降高まっている（第1 - 2図（2））。

3．領域別重要度と政策優先度の関係

「家族」を除き、重要度が高いと政策優先度も高い

次に、各領域の重要度と政策優先度との関係について調べる。

各領域の重要度と政策優先度の相関関係をみると、「家族」を除く、すべての領域について重要度が高いと政策優先度も高い傾向がある（第1 - 3図）。また、「医療と保健」「収入と消費生活」「勤労生活」等は45度線上に分布しており、重要度と政策優先度がほぼ同水準になっている。「勤労生活」については、96年から重要度と政策優先度が共に高くなっており、特に政策に期待する割合が高くなっている。

一方、「家族」については、重要度の水準は96年より低下しているものの、依然として、重要度の水準は高いが政策優先度の水準は低く、「家族」という領域は、生活の上で重要であるが、政策には馴染まないものと考えられている。

4．ライフステージ別領域別重要度

家族形成期以降で「収入と消費生活」「医療と保健」の重要度が高い

人生を6ステージに分け、それぞれのライフステージごとに最も重要と考える領域についてみると、学校教育期では「収入と消費生活」「勤労生活」の重要度が同じ割合で最も高く、独身期では「勤労生活」、家族形成期と家族成長期では「収入と消費生活」、家族成熟期と老齢期では「医療と保健」の重要度が最も高くなっている（第1 - 4表、ライフステージの区分は同表の備考参照）。

学校教育期は、回答者本人が学生の時期にあたり、最も重要と考える領域については、他のステージと比べて相対的に多くの領域に分散しているが、「教育と文化」と回答した人の割合は13.9%と他のステージに比べ相対的に高くなっている。また、99年は最も重要と考える領域として、「勤労生活」が「収入と消費生活」に次いで2位であったが、2002年は「収入と消費生活」と同じ割合となり1位となった。

独身期は、学校を卒業し、就職して経済的に自立する時期にあたるが、99年は最も重

要と考える領域として、「収入と消費生活」が1位であったが、2002年は「勤労生活」が「収入と消費生活」を抜いて1位となった。

家族形成期及び家族成長期は、結婚をした時期から子供がある程度自立する時期にあたり、仕事面でも働き盛りにあたる人が多い。96年は最も重要と考える領域については、「家族」と回答した人の割合は1位であったが、2002年は「収入と消費生活」「医療と保健」に次いで3位になっている。

家族成熟期及び老齢期は、子供も就職・結婚し、自分の老後の健康状態や暮らし向きについて考える時期にあたる。両ステージとも最も重要と考える領域は、「医療と保健」が最も高くなっている。

5. 「医療と保健」「収入と消費生活」の領域について

いずれも充足度が低下傾向

重要度と政策優先度がともに最も高い「医療と保健」と2番目に高い「収入と消費生活」の各領域について個別項目の変化を調べる。

充足度と重要度の関係をみると、どちらの領域も重要度は同程度に高いが、充足度は「医療と保健」の方が「収入と消費生活」よりも高くなっている。過去20年近くの動きをみると、重要度が高まる傾向にある一方で、充足度は低下傾向にある（第1 - 5図）。

充足度について詳しくみると、「医療と保健」に関する項目は、81年以降、「満たされている」（「十分満たされている」＋「かなり満たされている」と回答した人の割合が「収入と消費生活」に関する項目に比べ高いものの、そのレベルは過去20年近くの間には低下してきている。

また、「収入と消費生活」に関する項目は、81年以降、「満たされている」と回答した人の割合が低く、「満たされていない」（「あまり満たされていない」＋「ほとんど満たされていない」と回答した人の割合が高まる傾向にある。とりわけ「食品や薬品など商品の安全性が高いこと」は90年代に入り、「満たされていない」と回答した人の割合が顕著に上昇している（第1 - 6図）。

6. 「勤労生活」の領域について

重要度が高まる一方で充足度が低下する「勤労生活」

重要度と政策優先度がともに大きく伸びた「勤労生活」の領域について個別項目の変化を調べる。

「失業の不安がなく働けること」は、重要度が上昇している一方で、充足度が顕著に低下している。また、「やりがいのある仕事や自分に適した仕事ができること」「職業紹介や職業訓練のための施設や内容が充実していること」「希望する職業への転職が容易なこと」も、重要度の上昇と充足度の低下が生じている。このような動きが、「勤労生活」の政策優先度が大きく上昇している背景になっている（第1 - 7図）。

各項目で 90 年代に「満たされていない」と回答した人の割合が高まる

重要度が最も高い「失業の不安がなく働けること」と、その次に高い「やりがいのある仕事や自分に適した仕事ができること」の充足度を時系列で調べる。

これらの項目は、90 年代以降、「満たされていない」と回答した人の割合が高まっている。いずれも、99 年以降は約 5 割が「満たされていない」と回答しており、「満たされている」と回答した人の割合は 1 割から 2 割にとどまっている(第 1 - 8 図(1)(2))。

「勤労生活」について「満たされていない」と回答した人の割合は若い世代で高い

さらに、これらについて男女別年代別にみると、その特徴は、「失業の不安がなく働けること」では、(1)20 代で「満たされていない」と回答した人の割合が高いこと、(2)男性の 40 代から 50 代において、「満たされていない」と回答した人の割合が同世代の女性より高いことである。「やりがいのある仕事や自分に適した仕事ができること」については、男性では年代が若くなるにしたがって「満たされていない」と回答した人の割合が高まる傾向にあり、女性では、20 代で「満たされていない」と回答した人の割合が最も高くなっている。(第 1 - 9 図)。

7. 生活全般についての満足度

低下傾向にある生活全般の満足度

生活全般の満足度について 5 段階で尋ねた(問 7)。

生活全般に「満足している」(「満足している」+「まあ満足している」)と回答した人の割合は、調査開始以来最も低い 41.3% となり、現状への満足度は低下している。一方、「不満である」(「不満である」+「どちらかといえば不満である」)と回答した人の割合は上昇傾向にあり、2002 年は 26.6% が不満と回答し、調査開始以来最も高くなっている(第 1 - 10 図)。

60 代 70 代で高い生活全般の満足度

男女別年代別に生活全般の満足度をみると、「満足している」と回答した人の割合は、全体として低下しており、男女とも 50 代以下では 4 割前後にとどまる一方で、60 代、70 代は他の年代と比べ高い水準にある(第 1 - 11 図)。

世帯年収が多いほど生活全般の満足度が高い

男女別世帯の年収別に生活全般の満足度をみると、年収が高くなるほど満足度は高くなる傾向がある。800 万円を超えると約半数が生活全般に満足している(第 1 - 12 図)。

ライフステージ別では学校教育期、家族形成期及び老齢期で生活全般の満足度が高い
男女別ライフステージ別に生活全般の満足度をみると、学校教育期、家族形成期および老齢期で満足度が高くなっている。

男女別にみると、家族成熟期を除く 5 ステージで女性の満足度が男性に比べて高くなっている。また、99 年と比較すると、2002 年は、男女とも学校教育期で生活満足度が大きく高まっているものの、男性では学校教育期、家族形成期を除く 4 ステージで、女性では学校教育期を除く 5 ステージで 99 年を下回っている（第 1 - 13 図）。

第2章 世の中の方向、老後の見通し

1. 世の中の方向について

「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は90年をピークに低下

「世の中は次第に暮らしよい方向に向かっている」かについて尋ねた（問3（ア））。「暮らしよい方向に向かっていると思う」（「全くそうである」＋「どちらかといえばそうである」）と回答した人の割合は、90年の46.2%をピークに低下しており、2002年は14.3%と、調査開始以来、最も低い99年（20.6%）をさらに下回っている（第1-14図）。

「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は20代および70代で高い

男女別年代別にみると、男女とも、「暮らしよい方向に向かっていると思う」と回答した人の割合は、30代から60代までは1割程度である一方、20代および70代で相対的に高くなっている。また、全体的に男性に比べ女性の方が、「暮らしよい方向に向かっていると思わない」（「全くそうでない」＋「どちらかといえばそうでない」）と回答した人の割合が高い傾向にあり、男性に比べ女性のほうが世の中の方向について悲観的な見方をしている。

2002年の結果を99年と比べると、男女とも「暮らしよい方向に向かっていると思わない」と回答した人の割合が高く、世の中の方向について悲観的な見方をしている人の割合が高まっている。（第1-15図）

2. 老後の見通しについて

低下している「老後の明るい見通し」

「自分の老後に明るい見通しを持っている」かについて尋ねた（問3（イ））。「自分の老後に明るい見通しを持っている」（「全くそうである」＋「どちらかといえばそうである」）と回答した人の割合は、84年の35.8%をピークに低下し、2002年は、調査開始以来、最も低い99年（17.4%）を下回り、15.0%となっている（第1-16図）。

高齢になるほど明るい「老後の見通し」

男女別年代別にみると、20代から40代の男女ともに「自分の老後に明るい見通しを持っている」と回答した人の割合は1割程度であるが、50代から70代では、男女とも年代が上がるほど、「自分の老後に明るい見通しを持っている」と回答した人の割合が高くなる傾向にある（第1-17図）。

また、2002年の結果を99年と比べると、男性では概ねすべての年代で、「明るい見通しを持っている」と回答した人の割合が低下し、女性では40代以上で低下している。

子育てが一段落すると、「自分の老後に明るい見通しを持っている」人の割合が高まる
問3（イ）で尋ねた老後の見通しを子供の成長段階別に調べる。

「明るい見通しを持っている」と回答した人の割合は、第一子が小学校または中学校の親の場合は 8.3%に過ぎないが、すべての子供が就職または結婚した親になると 23.8%となり、子育てが一段落すると、「自分の老後に明るい見通しを持っている」人の割合が高くなっている（第1 - 18図）。

3．個人負担について

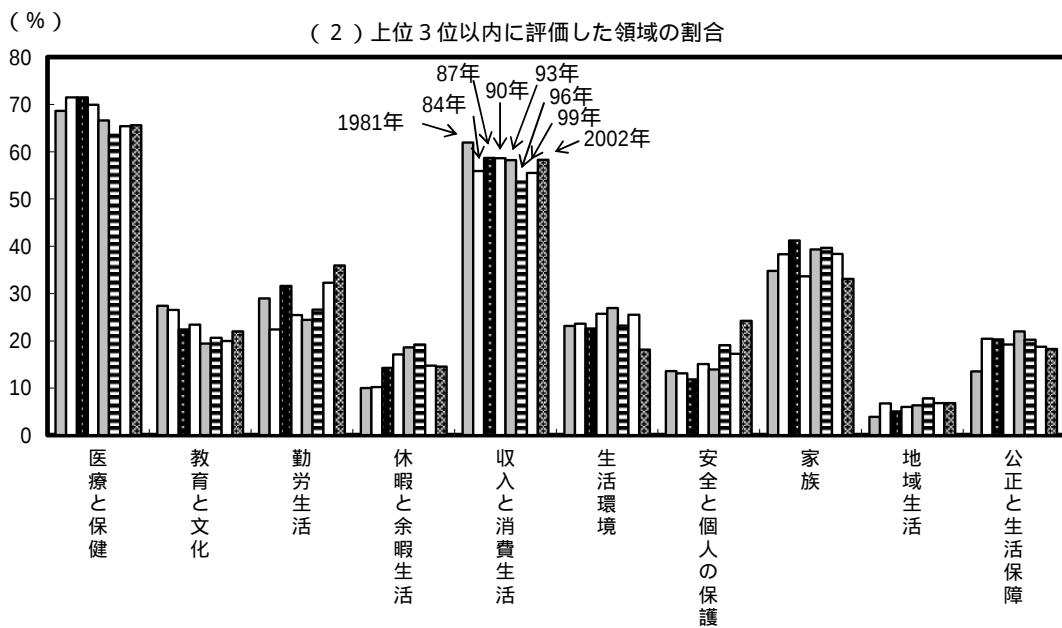
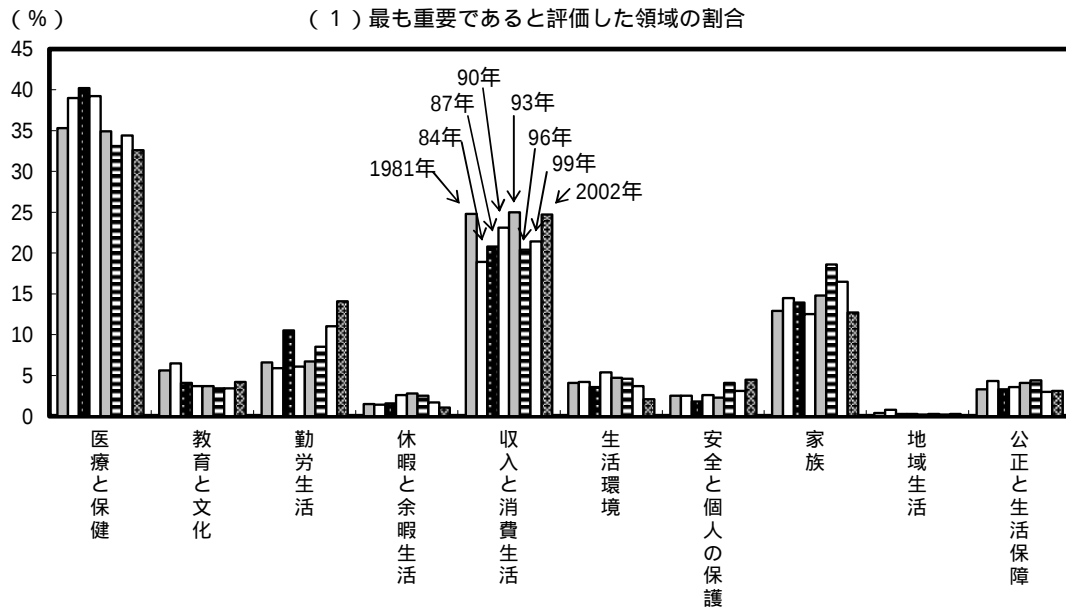
個人負担が増えることを肯定する割合が低下

社会施設の整備や社会保障の充実を図るにあたり、税金など個人の負担を増加させることについて尋ねた（問6）。

肯定する考え方（「個人の負担は当然である」＋「ある程度はやむを得ない」）は、99年と比べ低下しており、2002年は調査開始以来最も低く 40.6%となっている（第1 - 19図）。

(第1-1図) 重要度の高い「医療と保健」「収入と消費生活」、
近年高まっている「勤労生活」

「福祉の領域を大きく10の領域に分類した場合、あなたのいまの、あるいは、これからの生活にとって、重要な領域はどれですか。一番重要な領域、二番目に重要な領域、三番目に重要な領域について、それぞれお答え下さい。」



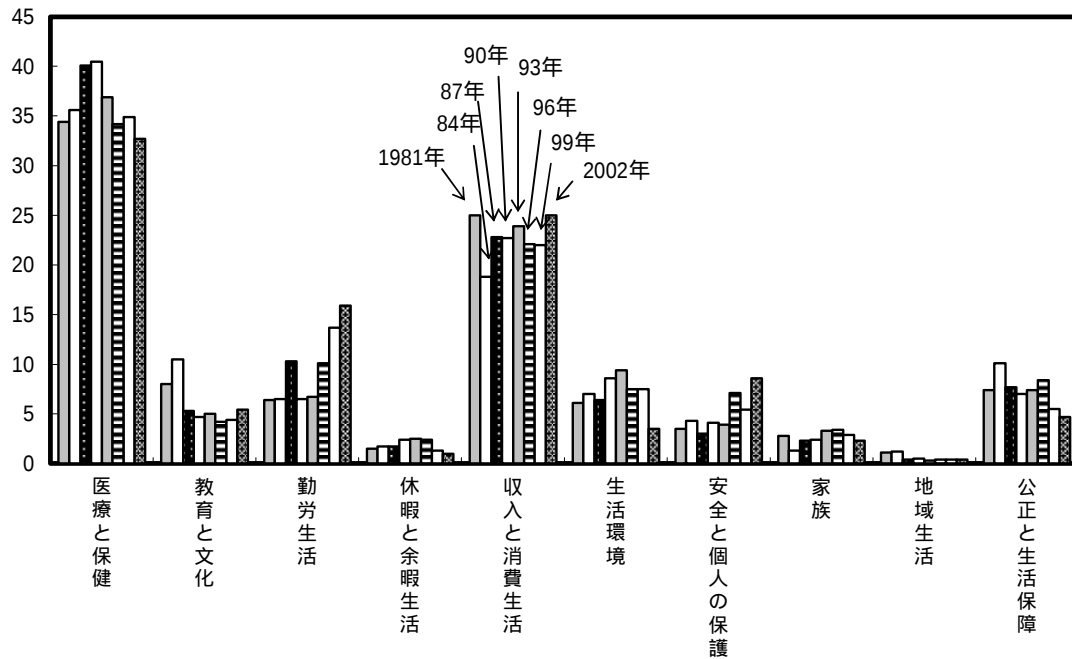
(備考) 本項目については1981年より調査開始。

(第1 - 2図) 政策優先度の高い「医療と保健」「収入と消費生活」、
近年高まっている「勤労生活」

「あなたご自身の立場からみて国や地方公共団体の施策として、力を入れてほしい領域はどれですか。一番力を入れてほしい領域、二番目に力を入れてほしい領域、三番目に力を入れてほしい領域について、それぞれお答え下さい。」

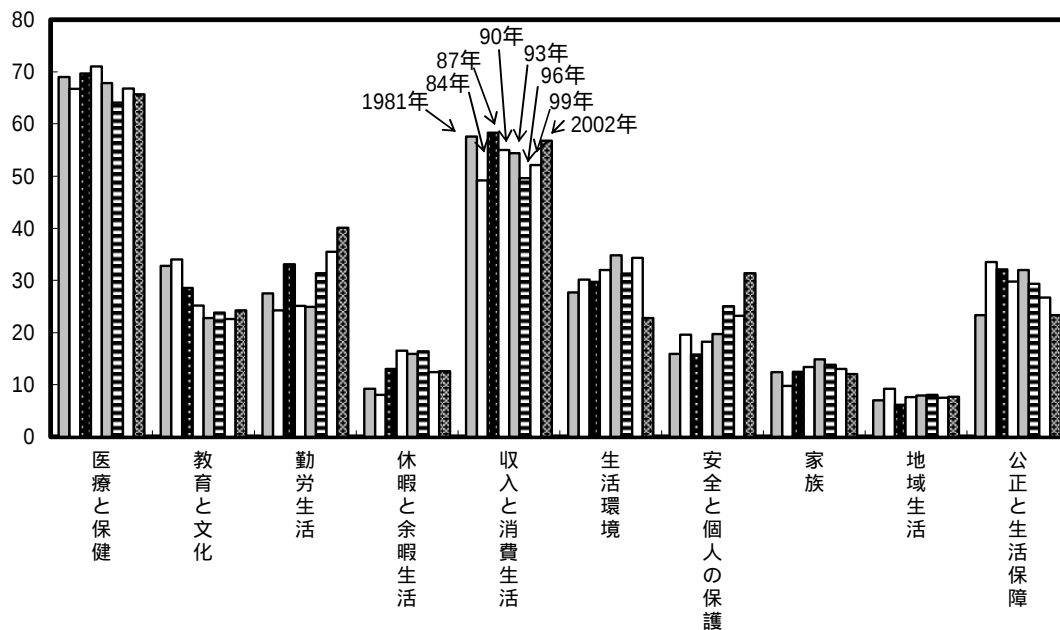
(%)

(1) 最も力を入れて欲しいとした領域の割合



(%)

(2) 上位3位以内に評価した領域の割合



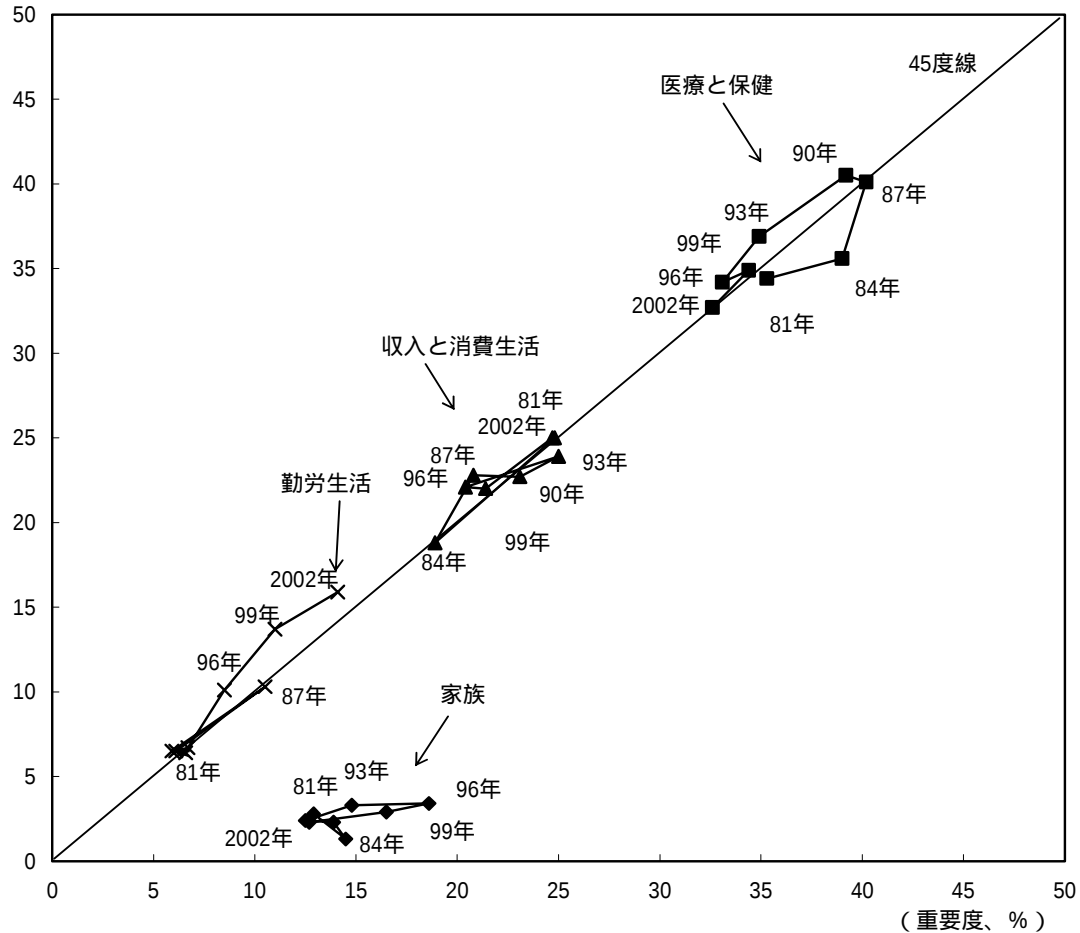
(備考) 本項目については1981年より調査開始。

(第1 - 3図) 「家族」を除き、重要度が高いと政策優先度も高い

重要度：「福祉の領域を大きく10の領域に分類した場合、あなたのいまの、あるいは、これからの生活にとって、最も重要な領域はどれですか。」

政策優先度：「あなたご自身の立場からみて国や地方公共団体の施策として、最も力を入れてほしい領域はどれですか。」

(政策優先度、%)



(第1-4表) 家族形成期以降で「収入と消費生活」「医療と保健」の重要度が高い

「福祉の領域を大きく10の領域に分類した場合、あなたのいまの、あるいは、これからの生活にとって、最も重要な領域はどれですか。」

順位 2002	学校教育期		独身期		家族形成期		家族成長期		家族成熟期		老齢期	
	順位 96 99		順位 96 99		順位 96 99		順位 96 99		順位 96 99		順位 96 99	
1	収入と消費生活(18.3)	2 1	勤労生活(28.9)	3 2	収入と消費生活(29.0)	3 1	収入と消費生活(31.9)	3 1	医療と保健(40.9)	1 1	医療と保健(52.2)	1 1
2	勤労生活(18.3)	4 2	収入と消費生活(25.8)	2 1	医療と保健(21.9)	2 2	医療と保健(21.6)	2 2	収入と消費生活(23.8)	2 2	収入と消費生活(19.3)	2 2
3	医療と保健(15.7)	1 3	医療と保健(17.4)	1 3	家族(17.6)	1 3	家族(17.5)	1 2	勤労生活(10.6)	4 4	家族(10.2)	3 3
4	教育と文化(13.9)	5 5	家族(9.6)	4 4	勤労生活(15.7)	4 4	勤労生活(15.0)	4 4	家族(10.5)	3 3	勤労生活(7.0)	5 4
5	安全と個人(12.4)	7 7	安全と個人(6.6)	7 6	教育と文化(6.3)	5 8	教育と文化(5.2)	8 7	公正と生活保障(4.8)	5 5	公正と生活保障(3.8)	4 5
6	家族(11.8)	3 4	休暇と余暇生活(3.1)	5 5	安全と個人(5.1)	6 9	安全と個人(3.1)	6 5	安全と個人(4.2)	7 7	安全と個人(2.7)	7 6
7	生活環境(4.1)	6 8	教育と文化(2.9)	9 8	公正と生活保障(1.6)	8 7	生活環境(2.0)	7 6	教育と文化(2.2)	8 7	生活環境(2.0)	6 7
8	休暇と余暇生活(2.4)	8 6	生活環境(2.5)	6 7	休暇と余暇生活(1.2)	8 6	公正と生活保障(1.9)	5 8	生活環境(1.7)	6 6	教育と文化(1.2)	8 8
9	公正と生活保障(2.4)	9 9	公正と生活保障(2.5)	8 9	生活環境(1.2)	6 5	休暇と余暇生活(0.7)	9 9	休暇と余暇生活(0.5)	9 9	休暇と余暇生活(0.5)	10 9
10	地域生活(0.6)	10 10	地域生活(0.2)	10 10	地域生活(-)	10 10	地域生活(0.3)	10 10	地域生活(0.5)	10 10	地域生活(0.4)	9 10

(備考) 各ライフステージは、以下の分類で区分した。なお、いずれの分類にも該当しない者は本表の対象からはずした。

学校教育期：高校、大学などの生徒または学生

独身期：40歳未満の独身者

家族形成期：子のない夫婦（夫婦ともに40歳未満）及び第一子が小学校入学前の親

家族成長期：第一子が小・中・高・大学などの親

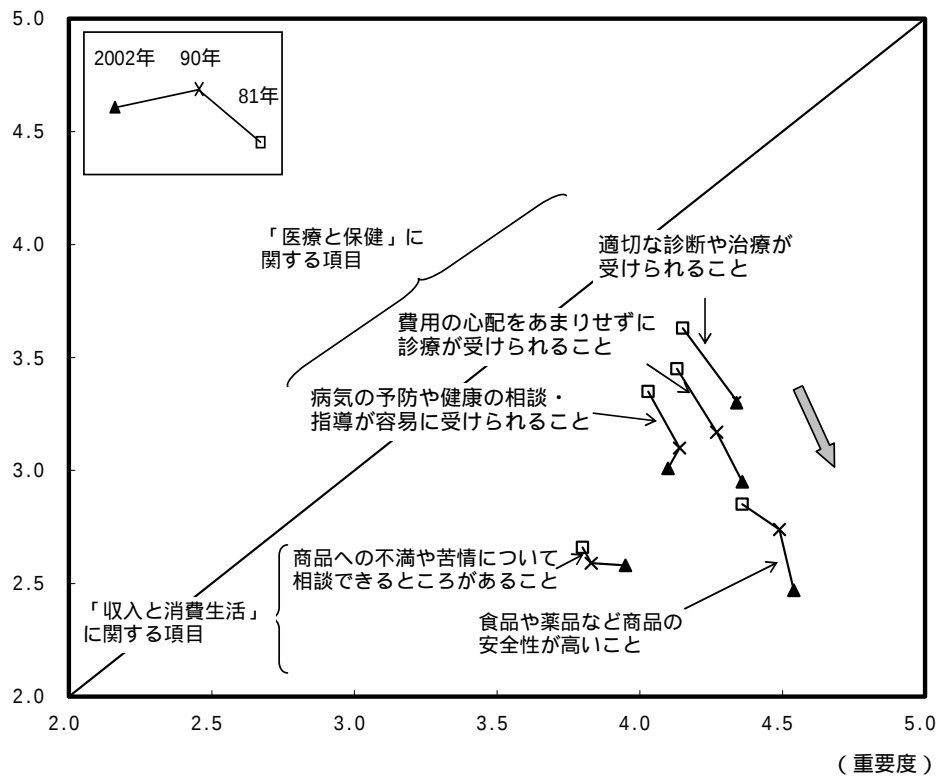
家族成熟期：就職または結婚した子供を一人でも持つ親

老齢期：すべての子供が就職または結婚した親

(第1 - 5図) 「医療と保健」「収入と消費生活」に関する項目では、重要度が高まる一方、充足度は低下している

「次の項目は、あなたにとってどのくらい重要なことですか(重要度)。また、どの程度満たされていますか(充足度)。」

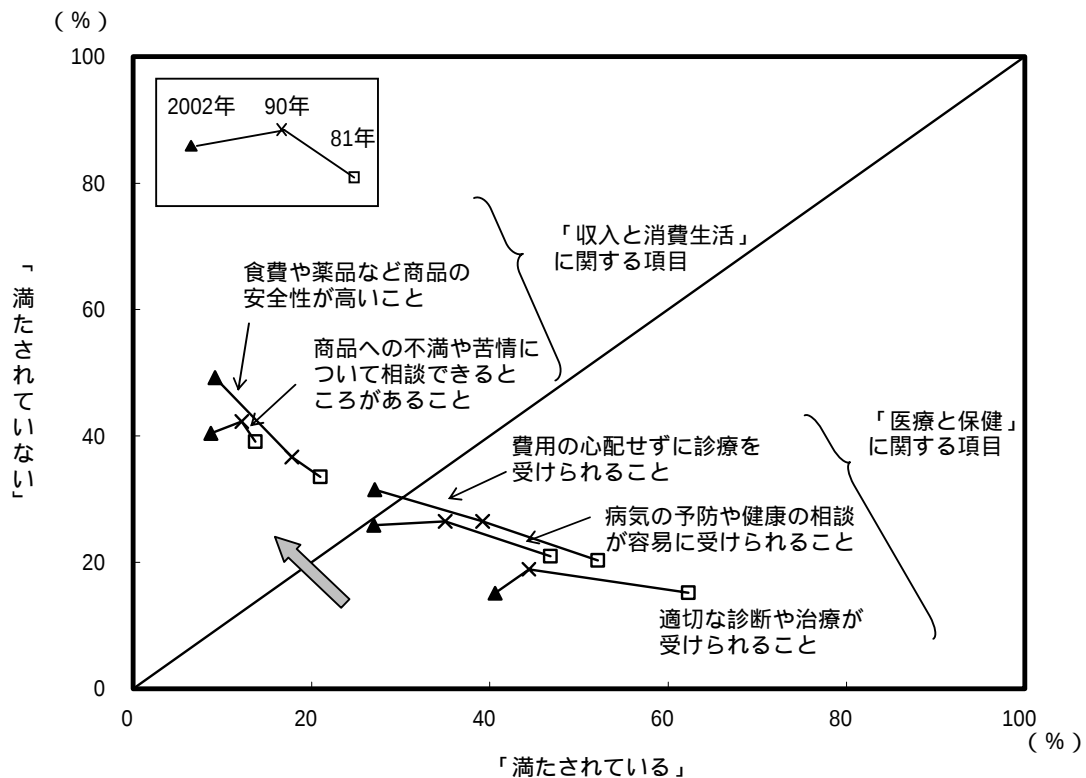
(充足度)



- (備考) 1. 重要度は、各質問項目について、どの程度重要であるかを「きわめて重要である」から「まったく重要でない」までの5段階で回答者に評価してもらい、「きわめて重要である」= 5点から「まったく重要でない」= 1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点。
2. 充足度は、各質問項目について、どの程度満たされているかを「十分満たされている」から「ほとんど満たされていない」までの5段階で回答者に評価してもらい、「十分満たされている」= 5点から「ほとんど満たされていない」= 1点までの得点を与え、各項目ごとに回答者数で加重した平均得点。

(第1 - 6図) 医療について「費用の心配のない診療」、消費生活については「商品の安全性」において、「満たされていない」割合は大きく上昇している

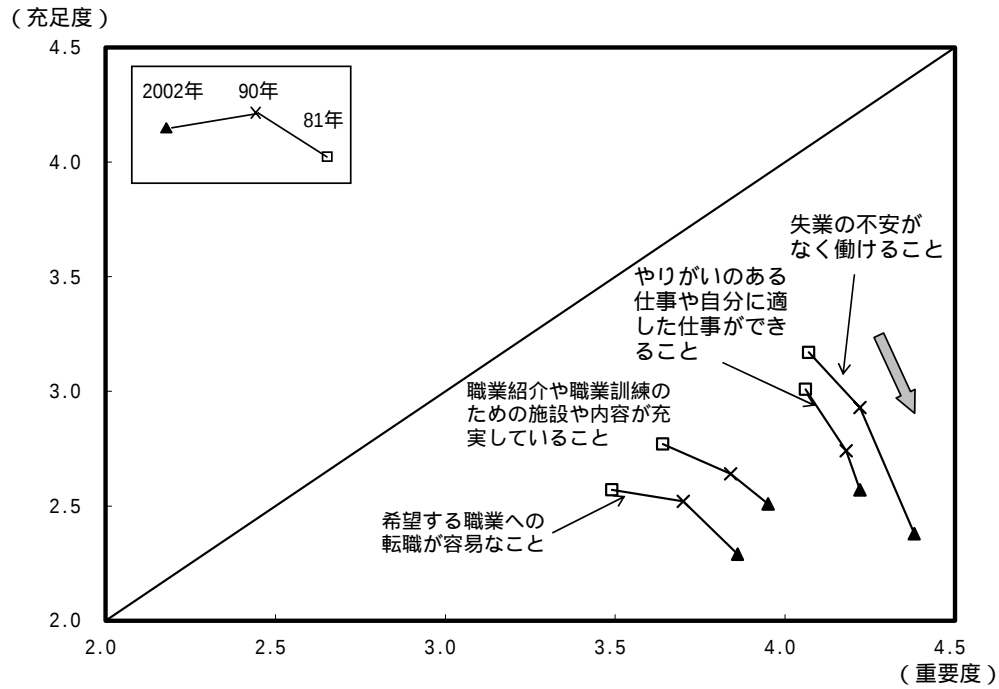
「次の項目は、あなたにとってどの程度満たされていますか。」



- (備考) 1. 「満たされている」人の割合は、「十分満たされている」「かなり満たされている」と回答した人の割合を合計したもの。
2. 「満たされていない」人の割合は、「あまり満たされていない」「ほとんど満たされていない」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1 - 7図) 「失業の不安がなく働けること」「やりがいのある仕事や自分に適した仕事ができること」等については重要度が高まる一方で充足度が低下

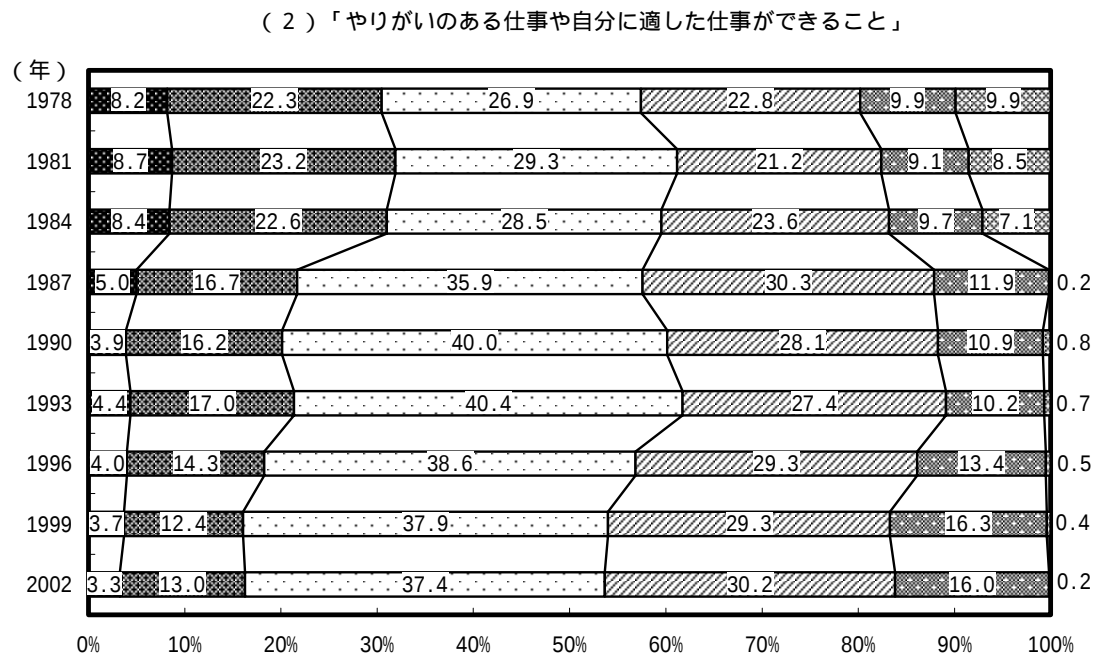
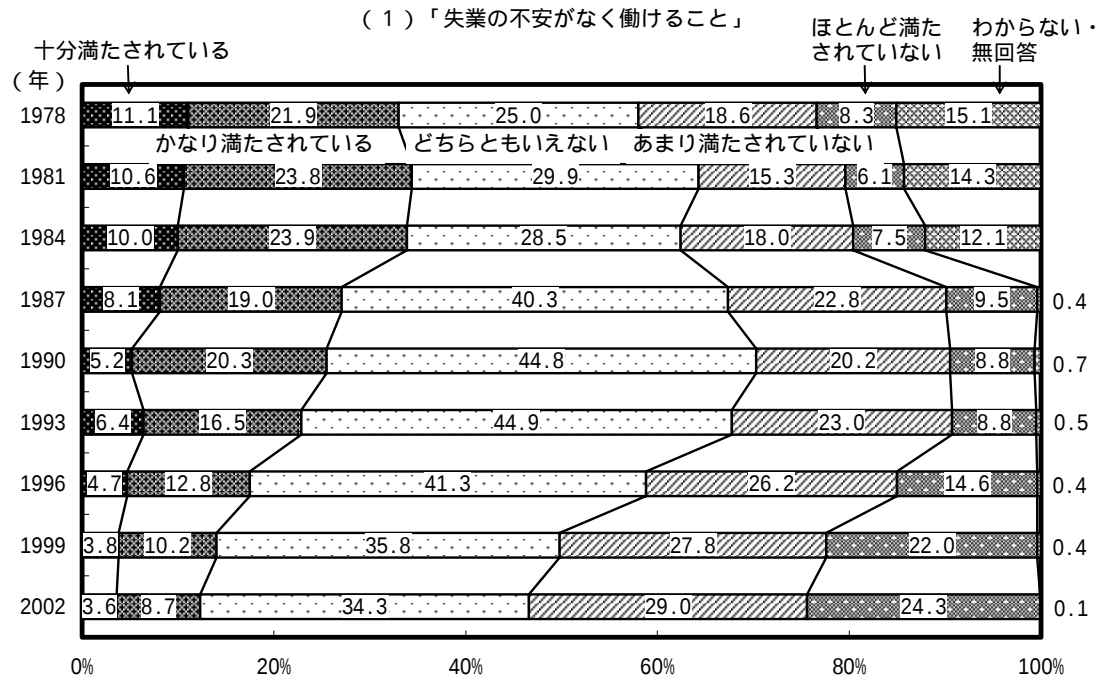
「次の項目は、あなたにとってどのくらい重要なことですか(重要度)。また、どの程度満たされていますか(充足度)。」



(備考) 重要度および充足度については、第1 - 5図の備考を参照。

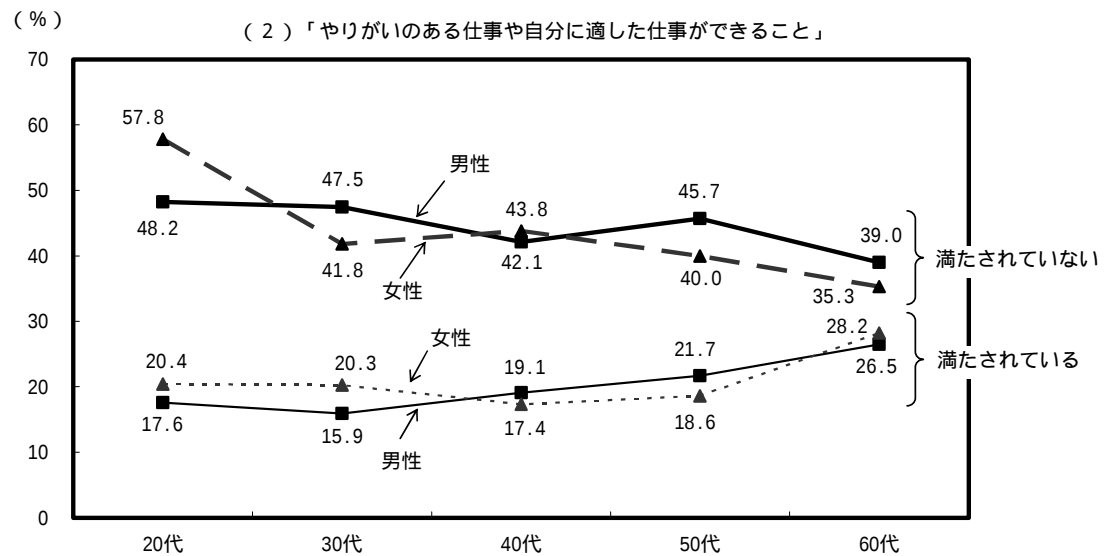
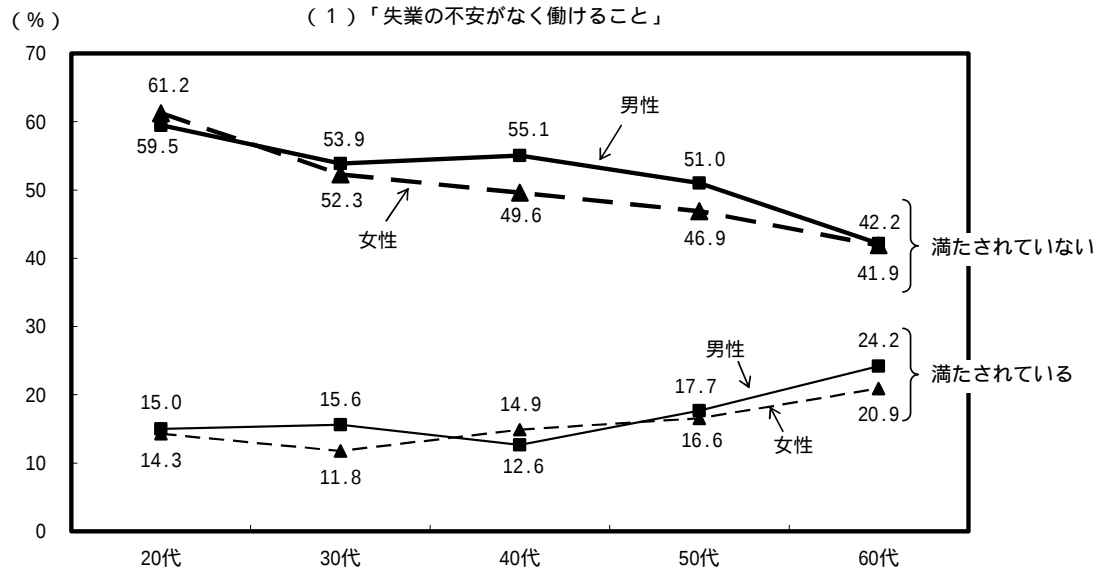
(第1 - 8図) 「満たされていない」と回答した人の割合が高くなってきている「失業の不安のなさ」と「やりがいのある仕事」

「次の項目は、あなたにとってどの程度満たされていますか。」



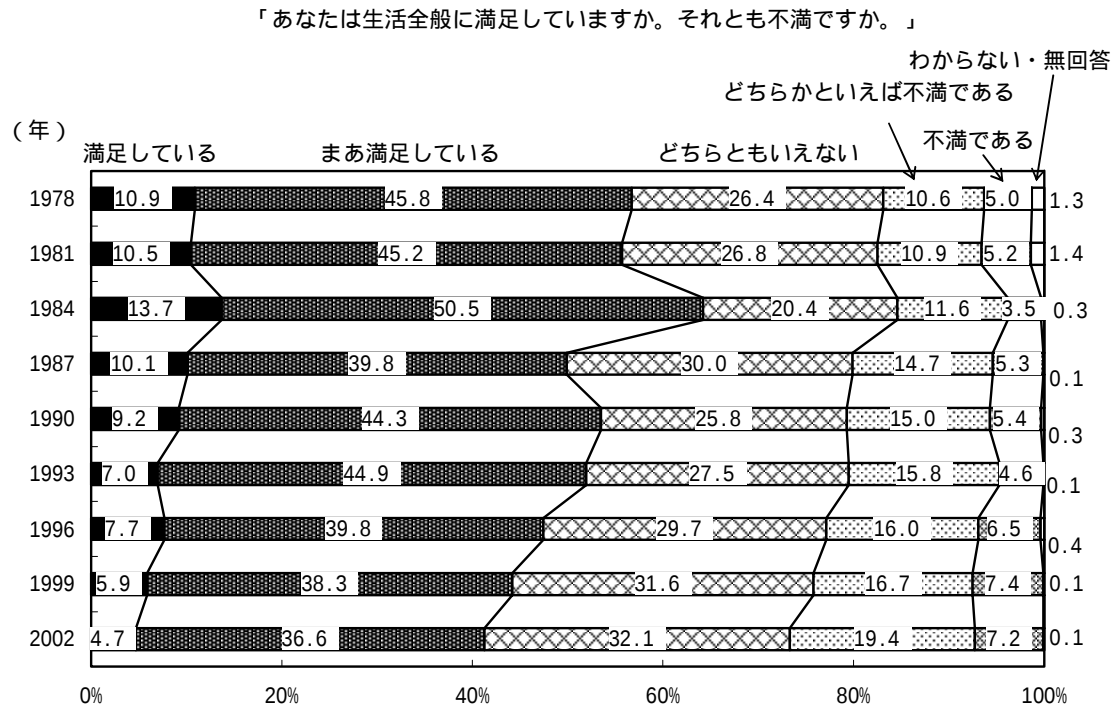
(第1 - 9図) 「勤労生活」について「満たされていない」と回答した人の割合は若い世代で高い

「次の項目は、あなたにとってどの程度満たされていますか。」

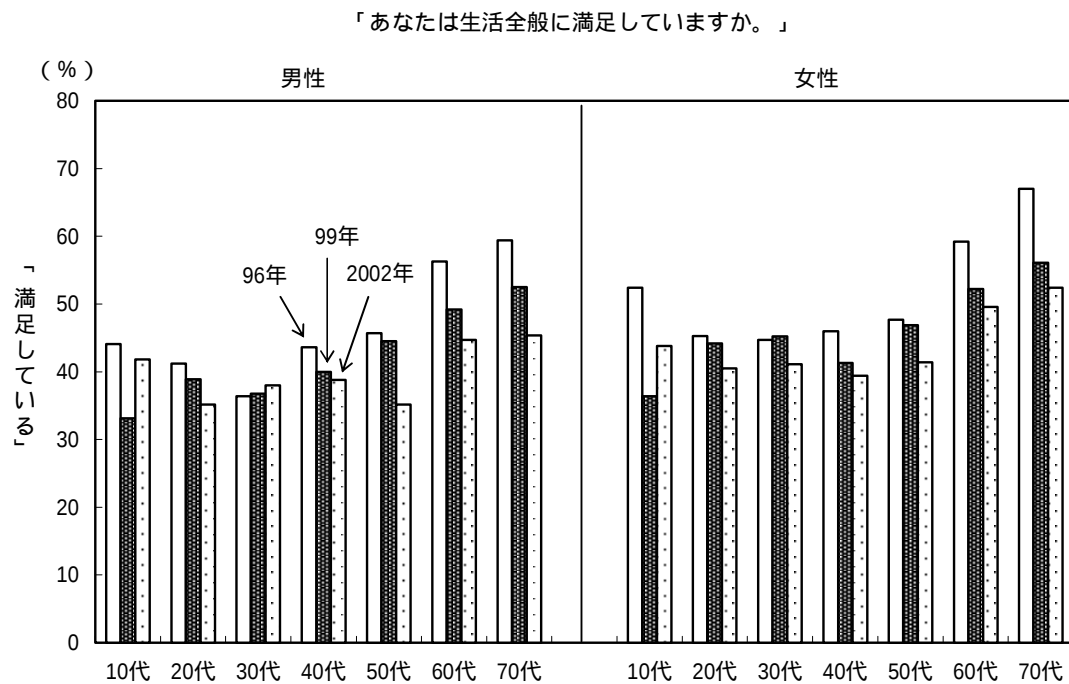


- (備考) 1. 「満たされている」人の割合は、年代別に「十分満たされている」「かなり満たされている」と回答した人の割合を合計したもの。
 2. 「満たされていない」人の割合は、年代別に「あまり満たされていない」「ほとんど満たされていない」と回答した人の割合を合計したもの。
 3. 対象は有職者のみ(パートタイム従業者は含まない)。
 4. 10代、70代はサンプル数が少ないため表示していない。

(第1-10図) 低下傾向にある生活全般の満足度

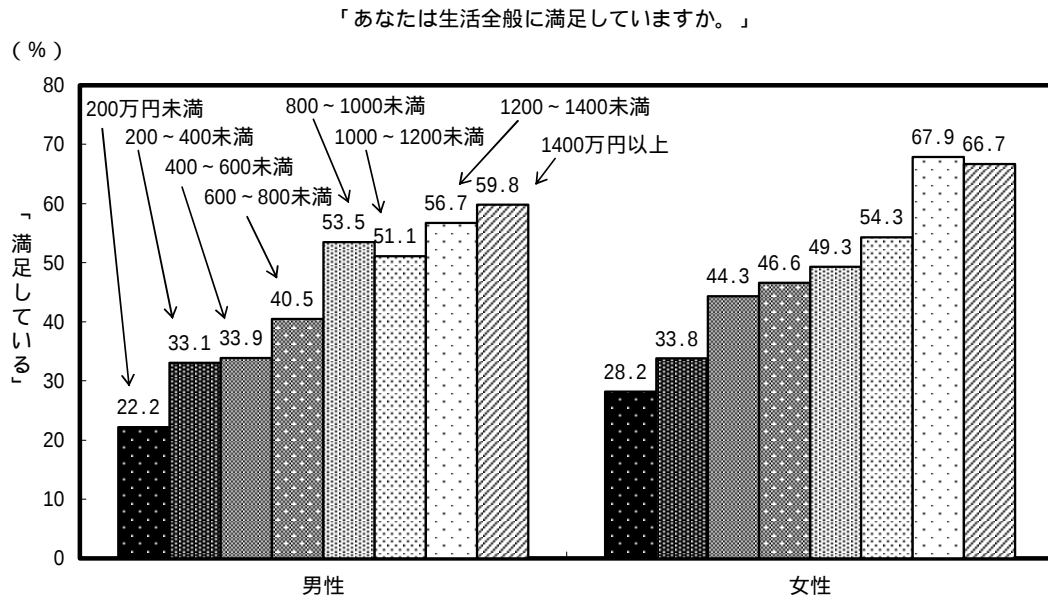


(第1-11図) 60代、70代で高い生活全般の満足度



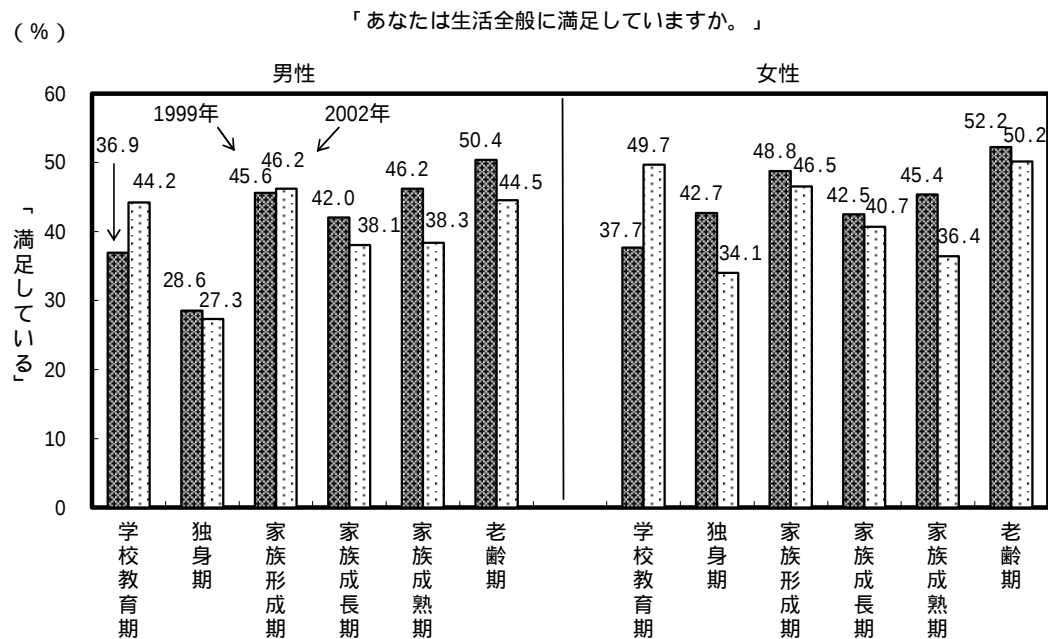
(備考) 「満足している」人の割合は、年代別に「満足している」「まあ満足している」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1-12図) 世帯収入が多いほど生活全般の満足度が高い



(備考) 「満足している」人の割合は、世帯年収別に「満足している」「まあ満足している」と回答した人の割合を合計したもの。

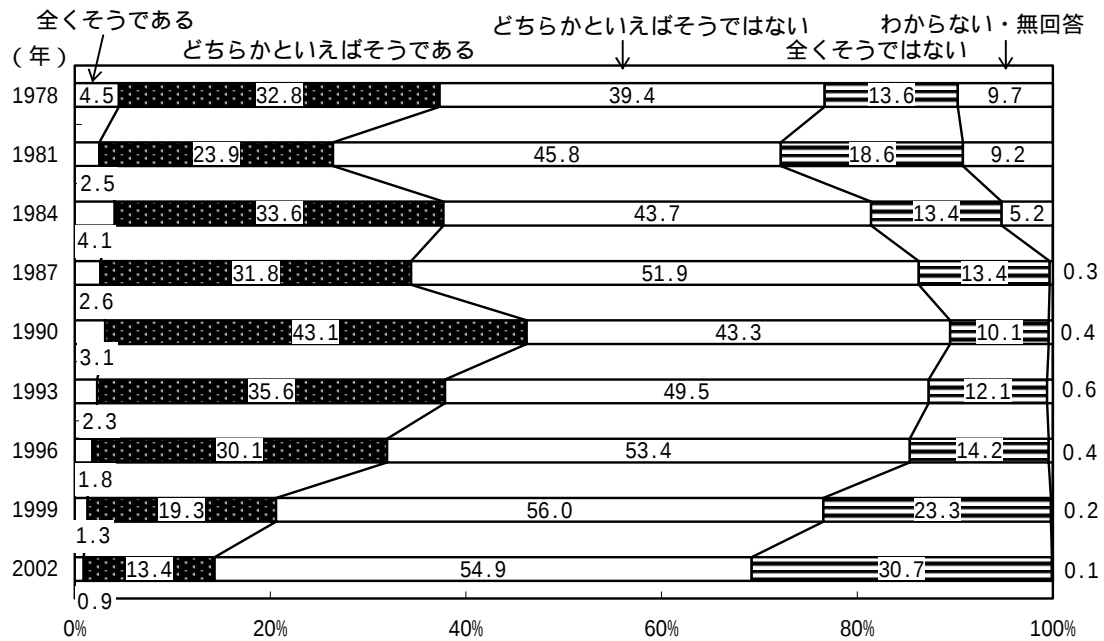
(第1-13図) ライフステージ別では学校教育期、家族形成期及び老齢期で生活全般の満足度が高い



(備考) 1. 「満足している」人の割合は、ライフステージ別に「満足している」「まあ満足している」と回答した人の割合を合計したもの。
2. ライフステージの区分は、第1-4表の備考参照。

(第1 - 14図) 「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は90年をピークに低下

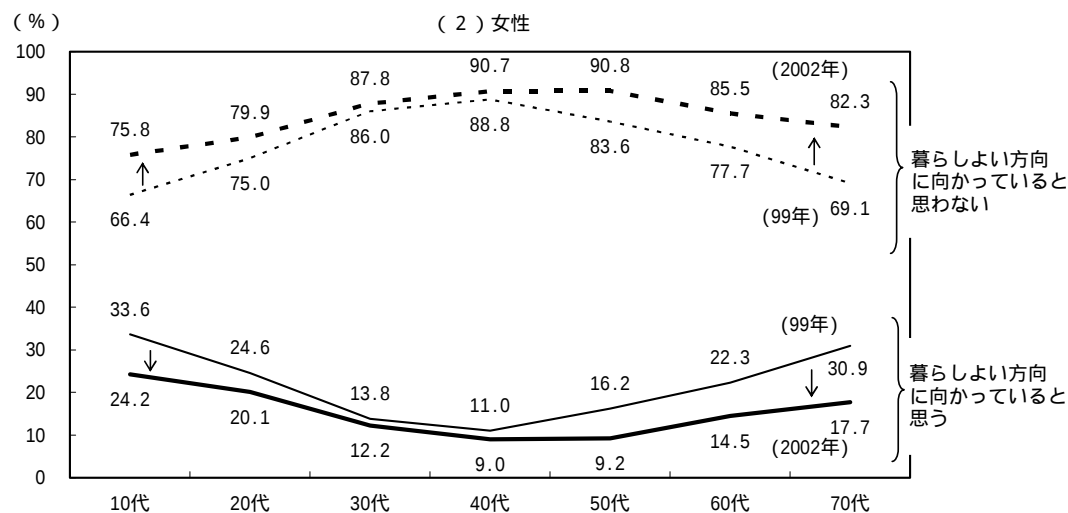
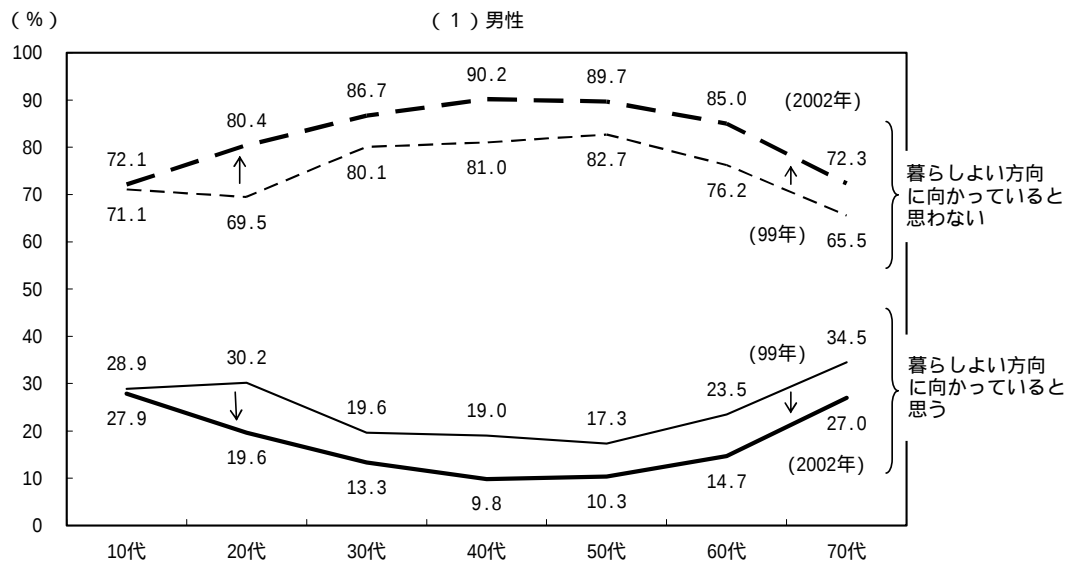
「世の中は次第に暮らしよい方向に向かっている」という意見について、どのように思いますか。」



- (備考) 1. 「暮らしよい方向であると思う」人の割合は、「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合を合計したもの。
 2. 「暮らしよい方向であると思わない」人の割合は、「全くそうではない」「どちらかといえばそうではない」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1 - 15図) 「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は
20代以下および70代で相対的に高くなっている

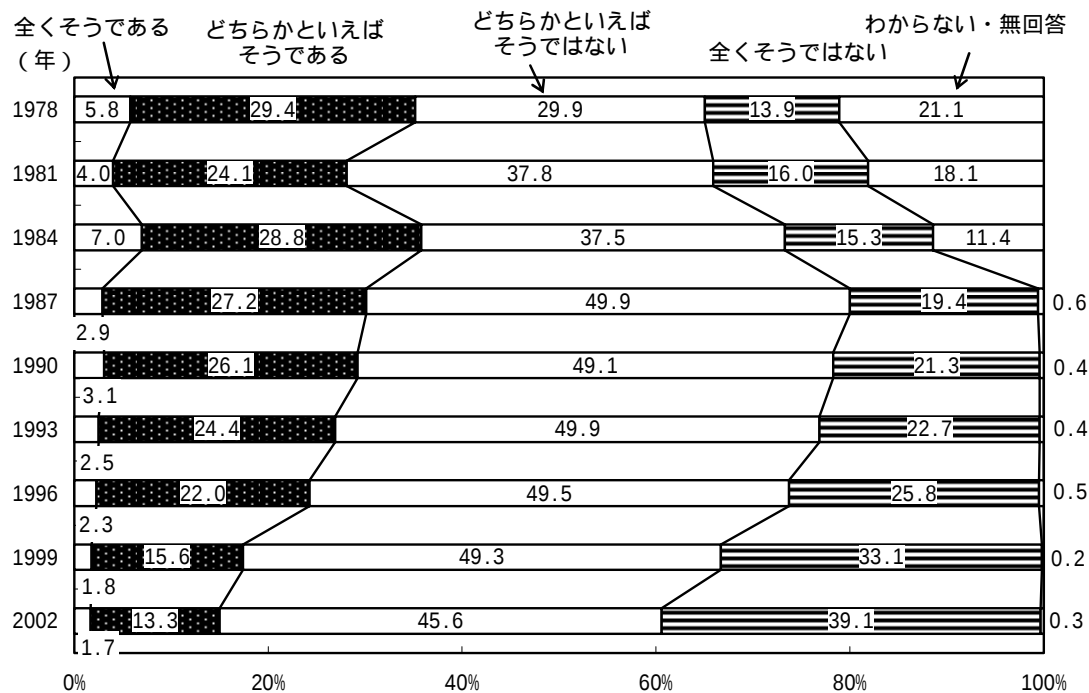
「世の中は次第に暮らしよい方向に向かっている」という意見について、
どのように思いますか。」



- (備考) 1. 「暮らしよい方向に向かっていると思う」人の割合は、年代別に「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合を合計したもの。
2. 「暮らしよい方向に向かっていると思わない」人の割合は、年代別に「全くそうではない」「どちらかといえばそうではない」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1 - 16図) 低下している「老後の明るい見通し」

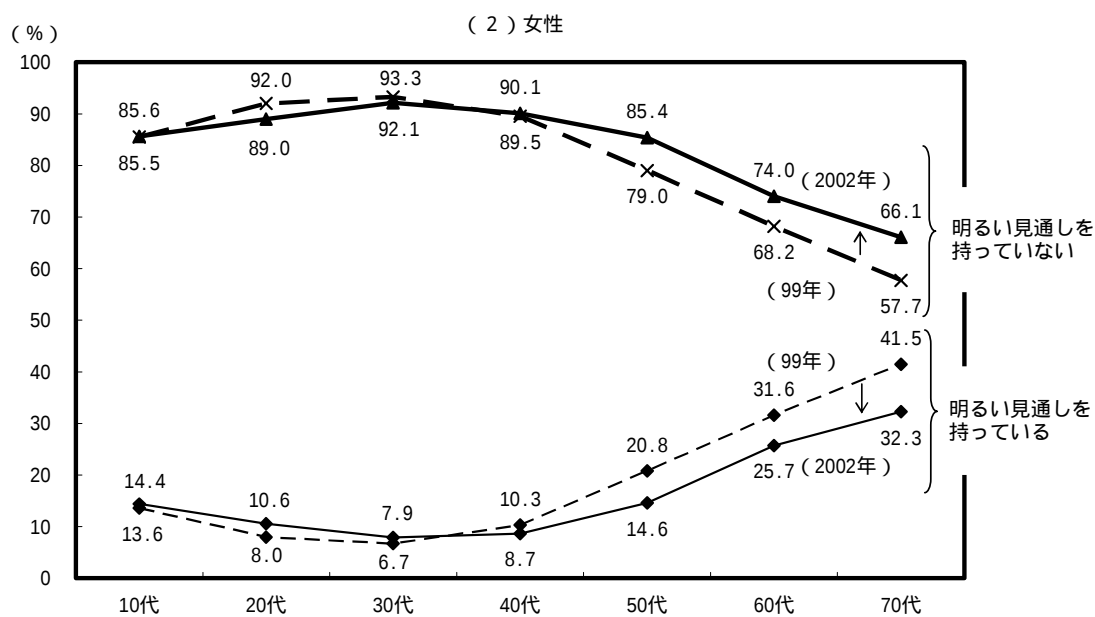
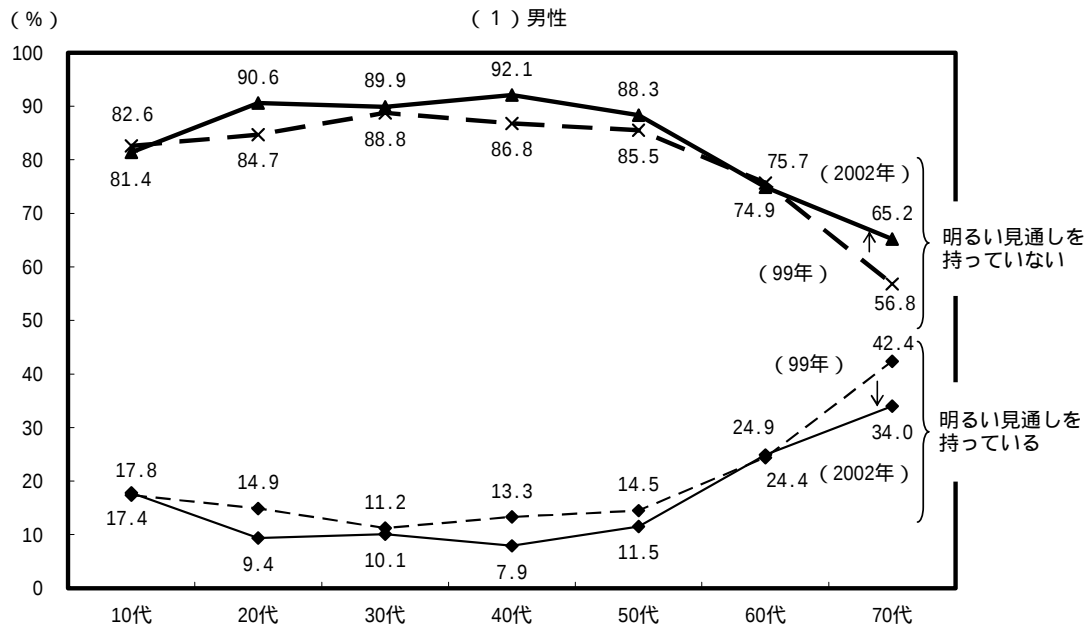
「自分の老後に明るい見通しを持っている」という意見についてどのように思いますか。」



- (備考) 1. 「自分の老後に明るい見通しを持っている」人の割合は、「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合を合計したもの。
 2. 「自分の老後に明るい見通しを持っていない」人の割合は、「全くそうではない」「どちらかといえばそうではない」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1 - 17図) 高齢になるほど明るい「老後の見通し」

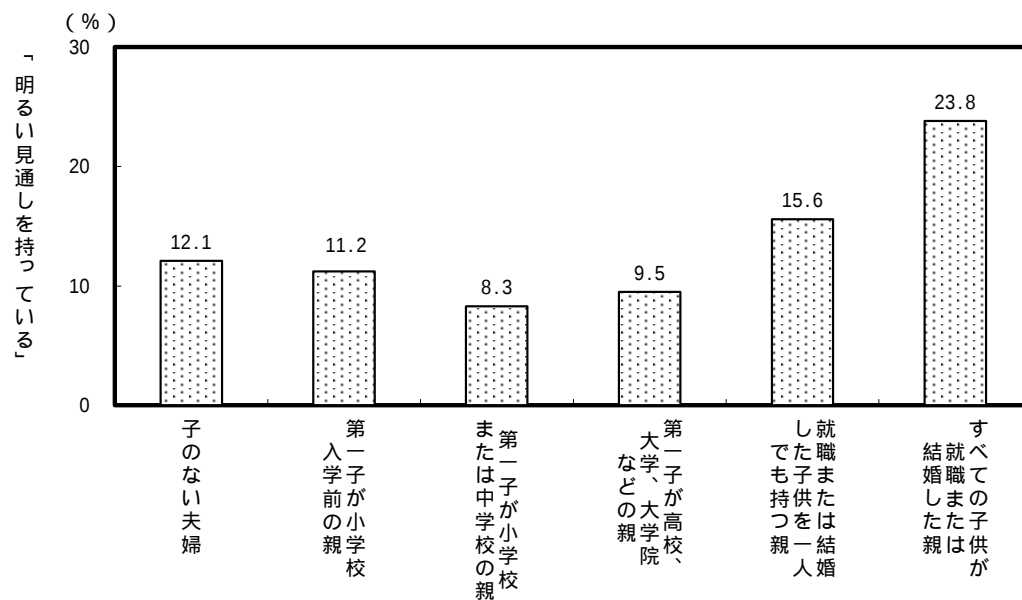
「自分の老後に明るい見通しを持っている」という意見についてどのように思いますか。」



(備考) 1. 「明るい見通しを持っている」人の割合は、年代別に「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合を合計したもの。
 2. 「明るい見通しを持っていない」人の割合は、年代別に「全くそうではない」「どちらかといえばそうではない」と回答した人の割合を合計したもの。

(第1 - 18図) 子育てが一段落すると、「自分の老後に明るい見通しを持っている」人の割合が高まる

「自分の老後に明るい見通しを持っている」という意見についてどのように思いますか。」



- (備考) 1. 「明るい見通し持っている」人の割合は、「自分の老後に明るい見通しを持っている」という意見について、「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と回答した人の割合を合計したもの。
 2. 回答者は、学生、独身者を含まない。

(第1 - 19図) 個人負担が増えることを肯定する割合は低下

「「学校、上下水道、公園などの社会施設を整備したり、老齢年金や国民健康保険などの社会保障を積極的に充実したりするためには、ある程度税金など個人の負担が増加してもやむを得ない」という考え方がありますが、これについてあなたはどのように思いますか。」

